

第8回（平成10年度）BELCA賞 ロングライフ部門 表彰作品

門司ゴルフ倶楽部 クラブハウス

所在地 北九州市門司区大字吉志175
用途 ゴルフ場クラブハウス
竣工 1960年
所有者 社団法人 門司ゴルフ倶楽部
設計者 株式会社 レーモンド設計事務所
施工者 株式会社 竹中工務店
維持管理者 社団法人 門司ゴルフ倶楽部



建設に当り、施主である安川理事長は、「簡単に壊せないもの、コンクリート造りで」と設計者に要望を出したところ、設計者アントニン・レーモンドは「屋根をかける」ことを提案してこの建物が出来た。門司ゴルフ倶楽部クラブハウスは、倶楽部開設25年後に建設され、倶楽部固有の雰囲気や歴史を大事にしている。建物は19番ホールのようなもので、18番ホールまでが主人公といいながらも、倶楽部全体を表わす表札と位置づけている。すでに二十数年間倶楽部を運営してきた実績をもとに、使い易い建物を望み、理事長自らセントアントリュースにも調査にいく念の入れようであった。クラブハウスは、英国式でまとめられ、食堂と談話室が区切られておらず、談話のためのスペースが食堂より大きくとってある。竣工後今日まで、増改築はほとんどなく、妻側のバルコニー部分にコンペルームを増設したぐらいである。丸太の小屋組みとコンクリート打放しが、今日でも艶がありきれいな状態である。深い庇の屋根で構成している効果が出ている。小屋組みの丸太は、当時のままで締め直したりしていない。大分県日田まで行って選んだ杉丸太は、木の素性を十分読み込んだ選定であったことが、30数年たった今日でも大きな狂いを生じさせていない。また、不必要なものは出来るだけ排除して原形を保っていることが、時間の重なりと合わせ一層空間を引き立たせている。

小屋組みに沿って張られた天井は高く、自然換気に有効で冷房はない。暖房は窓際の溝に温水を通す直暖と、食堂・談話室の中央にある暖炉である。大屋根と下屋の切り返しのところ設置された高窓は、換気に有効であり、はめ込まれた障子が室内に心地よい明るさをもたらしている。近年のゴルフクラブハウスとは様相をことにするが、「これがこの倶楽部のあり方である」とする倶楽部の精神が、会員の支持を受けて今日のクラブハウスを支えている。

大掃除は、10年前だというのに、天井の化粧野地板に艶があり、ゆったりとした時間の経過が感じられて心地よい。この建物の特徴を成す屋根の構造は、化粧野地板の上にインシュレーションボードその上に野地板、亜鉛鍍鉄板をはっている。メンテナンスといえば、その鉄板屋根を、オイルペンキで塗り替えているぐらいで、手のかからない建物である。

建設当初から変わったところといえば、設備的に温水の熱源が、石炭から石油に変わっていることと、コンペルームが増築されパッケージが置かれ、脱衣室と事務室など部分的に冷房しているぐらいで、あとは当初のままである。

ゆったりとしたバルコニーに、グリーンを背に置かれたノエミ婦人デザインの白いテーブルと椅子が大変印象的である。レーモンドの作品の中でそのままの状態に残っている数少ない例である。また、ゴルフ場が市民に開放されていて、早朝には散歩している人が多いと言う。いい話である。BELCA賞として相応しい建物と評価する。